

B O O K



『バイオセーフティの原理と実際』

特定非営利活動法人 バイオメディカルサイエンス研究会 編

この度、バイオメディカルサイエンス研究会（編集委員長 小松俊彦）編集による「バイオセーフティの原理と実際」が刊行された。本書は、2008年に刊行された「バイオセーフティの事典 みみずく舎刊」に続くものであり、バイオセーフティの理論と技術の実際面をまとめたものである。前書が、主に微生物ごとのバイオセーフティを論じたのに対し、本書では「行為」ごとのバイオセーフティが中心テーマとなっている。各項目に、写真と図が豊富に提示されていて、バイオセーフティ研究室を構築する際や運用する際に有用となる。

前半では、研究室での病原体の扱い方を解説している。特に、実験室感染とバイオテロの実例の紹介は、感染微生物を扱っている施設にとって、改めてバイオセーフティの重要性を喚起する。バイオセーフティレベルに沿った微生物実験法の解説は、研究室毎に必要な「研究室マニュアル」の作成の助けとなる。

後半では、基礎研究室のみでなく、医療機関、医薬品開発と管理、および食品管理におけるバイオセーフティに言及している。昨今、MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）、MDRP（多剤耐性緑膿菌）、MDRA（多剤耐性アシネトバクター）による重大な院内感染事例の報告が相次いでいる。また、NDM-1やKPCなどの新種の薬剤耐性遺伝子保有菌への対応も重要な課題となっている。細菌だけでなく、インフルエンザやノロなどのウイルスによる院内感染も重大事例として毎年報告され、特に、2009年の新型インフルエンザウイルスのアウトブレイクの際は、各医療機関が対応マニュアル作成に苦勞した。本書は、院内感染対策法のソフトとハードの実際を解説し、各医療施設に応用しやすいスタイルとなっている。厳密なバイオセーフティ管理は、医薬品が開発製造される過程でも必須である。これまでも、生物製剤やワクチンで、製造過程でのウイルスや微生物構成成分の混入の事例があった。医薬品製造における汚染防止のための現行の管理基準について解説されている。また、細菌やウイルスに汚染された食品による健康被害も後を絶たない。現在、食品を扱う施設では、HACCPシステムを基本として、それぞれの施設に見合った規定が作成されている。本項では、予防策の理論的な裏づけとそれに基づく具体的な手順を、1990年以降の事例に照らしながら解説している。

本書は、バイオハザード実験室での基礎研究者、医療従事者、食品取扱者ばかりでなく、生物に接する仕事に従事する者が、バイオセーフティの実際を広く知るために通読することもお勧めできる。

昭和大学医学部臨床病理
福地 邦彦

発行：みみずく舎 発売：医学評論社
定価：3,990円（本体3,800円＋税190円）